



事例 4 SDGs

SDGsの取り組みを できることから進める

株式会社亀右衛門は2006年に設立し、訪問介護、居宅介護を中心に介護・福祉サービスを世田谷区、目黒区の利用者に提供している。同社は、SDGsへの取り組みを始めている。SDGsとは、2015年に国連サミットで採択されたもので、「貧困をなくそう」、「飢餓をゼロに」などの17のゴールと、169のターゲットから構成されている持続可能な開発目標を2030年までに達成しようという世界的な取り組みだ。

株式会社亀右衛門

SDGsに取り組むことは 社会の潮流をつかむこと

SDGsというと、介護には関係ないと思われがちだ。しかし、これは社会を持続させるために必要な取り組みであり、介護事業者ができることも少なくない。「介護」の仕事をやrittつ、社会貢献にもつながるという意味を広げようとしている事業者の取り組みを紹介する。

同社では、元代表取締役社長の福嶋陽子さんが、SDGsに早くから賛同を示したことを機に、創立15周年の節目に会社としても積極的に取り組むことに。まずはSDGsについて関心をもち、理解することが何より大切と考え、国連本部のあるニューヨークに連絡をし、ピンバッジを取り寄せることから始めた。具体的な行動としては、オリジナルリフレクターを無償で地域貢献のために配布。希望する方には販売し、売り上げすべてを寄付している。また、使用済み切手やペットボトルキャップを集めて寄付し、世界の子どもたちの

保健医療協力やワクチン接種に役立ててもらおうといった活動を実施。スタッフをはじめ、利用者やご家族、取引先でも賛同して協力してくれる人が増え、皆を巻き込みつつ一丸となって活動をしているという。利用者に対して、小さなことからできることがあることを知らせる手紙などを出し、周知しているという。

また、災害編・感染症編のBCPを、同社では早くから策定。BCPもSDGsも人命や生活基盤、環境、事業を守ることにつながっているからだ。さらに、非常用保存食品を賞味期限が来る前に入れ替え、

フードバンクなどに寄付することで食品ロスを防いでいる。

加えて、マイバッグやマイボトルの使用も推奨している。社員に1000円程度を補助し、購入を促している。子育て中の社員への支援として、同社独自の子ども手当の支給や子どものインフルエンザ予防接種の費用補助なども行っている。

「SDGsが掲げる17のゴールは、どれ一つとっても一企業の手には負えない大きな目標に感じられます。しかし、貧困をなくそう、飢餓をゼロに、などの内容は、どれも賛同できるものばかりです。小さな会社で

株式会社亀右衛門
 ● 東京都世田谷区三軒茶屋1-35-1
 三軒茶屋ゴールドビル203
 TEL 03・5431・3911
 URL kameemon.co.jp/
 2006年8月設立。訪問介護サービスや居宅介護支援事業所、障害福祉サービスなどを、東京都世田谷区や目黒区で展開し、若手の育成にも力を入れている。



「介護事業者でもSDGsには十分取り組める」と話す、福嶋俊造さん

も、できることからやっつけていこうとすることが大切です」と、同社代表取締役社長の福嶋俊造さんは言う。特に同社がSDGsについて積極的になった背景には、大手の企業をはじめとしてSDGsを踏まえた経営をすることが、ビジネスのルールになっていくことがある。「どんな業界の企業であれ、SDGsを無視してビジネスを続けていくことはできない」と福嶋さん。もちろん介護

業界でも、規模にかかわらずSDGsへの対応は必要だ。「介護業界は別」と考えず、世の中の大きな流れに則った経営をしなければ、人の採用なども含めビジネス上の不利益を被ることになりかねない。

長い目で見れば変化とイメーリアップにつながる

同社では、日常的なミーティングの場で、SDGsへの取り組みを行う意義や具体的に何をすることがそれにつながるのかを伝えているという。

また、『「子どもSDGs なぜSDGsが必要なのかがわかる本(※)」を社員に配布し、理解を促している。新聞などにSDGsに関連した記事があれば、コピーしたものを閲覧させるなど、SDGsへの意識づけも行ってきている。「介護という仕事+αで社会貢献をするということについて、社員が理解し、考えてくれればいいと思います」と、福嶋さんは期待する。介護自体も社会貢献ではあるが、そのうえで、自分たちに何ができるのか、介護をしながらも環境問題や社会的課題に対し問題意識をもつことは、社員教育としても意味のあることだろう。

社内でも切手などを集める(右)。交通自己の予防にもつながられるオリジナルフレクター(左)



口構成を見れば、しばらく先の需要も予想することができるビジネスです。やる気のある若者が入ってくれば、もっと大きく発展する業界になるはず。しかし、介護の仕事の日本社会でのプレゼンスは低い。こうしたSDGsへの取り組みが介護業界に広がることで、目の前にある業務をこなすだけでなく、社会に目を向けることを学び、広い視野で物事を見ることができるようになることを期待しています」と、福嶋さんは展望する。

社会貢献とは何かを考えることは、仕事の意義を再確認することにもなり、社会が必要とする介護というサービスを提供している自分の会社に対する誇り、自尊心の高まりにつながっていくことも可能だ。ささやかなSDGsへの取り組みだが、それは間違いなく前進への大きな一歩だ。介護事業者といえども、SDGsへの対応は不可欠のものとなっていく。踏み出さなければ、何も変えられない。同社は、その一歩を踏み出し、変化を呼び込もうとしている。

※『子どもSDGs なぜSDGsが必要なのかがわかる本』秋山宏次郎監修・パウンド著カンゼン刊